

■今年の国語は！？

記述問題増、一昨年レベルに戻る！

■出題形式

㊦論説文、㊧物語文、㊨漢字と言葉に関する問題、という形式に変化はなかった。しかし、小問数は若干増えた。また、記述問題は6問、ぬき出しも1問出題された。特に記述は、昨年度（'19年度）に比べ問題数、指定字数ともに増え、難化した。㊨は、漢字、品詞、助詞、四字熟語、敬語が出題された。今後も幅広い知識が問われる傾向に変化はないだろう。

難易度については、'18年度は最高点・平均点ともに低く、昨年度は最高点が非常に高かったが、今年度（'20年度）は最高点・平均点ともに適正なレベルになったといえる。

	2018年度	2019年度	2020年度
制限時間	60分	60分	60分
大問数	3問	3問	3問
小問数	22問	22問	23問
配点	100点	100点	100点
最高点	78点	96点	86点
受験者平均点	56.6点	63.3点	60.1点
合格者平均点	非公表	非公表	非公表

※ II類は国・算・理・社各100点の400点満点で判定。III類は算数150点、国語・理科各100点と社会50点の400点満点で判定。

■出題内容

- ㊦ 論説文：『生命を考えるキーワードそれは「動的平衡」』 福岡 伸一 約5350字 富山県生涯学習カレッジ
- ㊧ 物語文：『愛なき世界』 三浦 しをん 約4200字 中央公論新社
- ㊨ 漢字と言葉に関する設問

㊦ 『生物と無生物のあいだ』『せいめいのはなし』など入試で出題された著書がある生物学者の福岡伸一の文章。細胞から生命の長い進化の歴史までを「動的平衡」というキーワードで説明した文章。文中で説明がされているとはいえ「動的平衡」や「エントロピー増大の法則」など小学生には難解な言葉が使われていたため、文章全体の内容を理解しようとした受験生の中には、むだに時間を費やした者もいたのではないだろうか。ただ、設問を解くということのみを考えるのであれば、部分的に理解するだけである程度は解くことができた問題も多かった。（ほぼ記号選択とぬき出しであり、記述は、問三（40字以内）、問四（60字以内）、問九（字数指定なし）の3問であった。）

㊧ 「大学院生の本村は植物の遺伝子を取りちがえて実験していたことに気づき、どうすればいいか迷っていた。しかし、仲間たちに相談し実験の方向性を決めることができすっきりした気持ちになる。」という物語の一場面からの出題。わかりにくい言葉も若干あるが、話の流れは比較的つかみやすい文章であった。主人公（本村）と登場人物（藤丸）の心情を問う問題や、抱いた感情の根拠となる行動をぬき出させる問題などバラエティに富んだ構成になっている。

㊨ 「漢字の書き取り」5問、「品詞の区別」（形容動詞）・（助詞 [の] の区別）の2問、「四字熟語」（用字まちがいの訂正）2問、「敬語」（尊敬表現と謙譲表現の使い分け）1問であった。

■合格に向けての対策

㊦ 例年、論説文（説明文含む）が出されますが、難度の高い文章が出る事が多いので、述べられていること全体をつかめないと感じたときに、設問ごとに部分的に対応する練習が必要です。記述（本文のことばを用いて）は、まず本文に書かれている内容をまとめる力と、それに加えて、自分で少し言葉を変えたり補ったりする問題もあるので練習しておいてください。

また、今年度の問九のように、字数指定がなく、本文の内容から自分で考えて答えを作り上げる問題もあります。日ごろから、社会で話題となっている事柄について興味関心を持って一定程度の知識を持つておくことが望ましいといえます。

㊧ 物語文は、例年読みやすいものが多く得点源にしたいところです。ただし、単純に心情を問うだけでなく、他の表現とどのように関連しているか、また、ある表現を用いる理由は何か、本文の表現についての説明をさせるなど、さまざまな角度から問われるので、こういった練習も有効です。

㊦・㊧に共通することとして、記述には別解が想定されるような設問があると予測されます。本文にない言葉だけで答えを書くことが要求されることはないのですが、本文の中から使える部分をさがし、それを元に記述する練習をすることが必要です。

㊨ 毎年出題数は同じではありませんが、漢字は必ず出題されます。また、その他のことばの問題は、幅広く取り組む必要があります。出題形式としては、正しく使われているものを選びせたり、間違った使い方をしているものを直させたりする問題も多いので、単に暗記だけではない学習も必要です。漢字や言葉に関する問題だけで20点分あると思われるので、ここでしっかりとれるかどうか得点の下支えとなるので、日ごろから怠らないようにしてください。

II類については、50%~60%の得点率、III類については、70%の得点率を確保したところです。そのためには、II類は、記述以外での正解率70%以上を、III類は記述以外での正解率80%以上・記述の正解率60%以上を目標に努力を重ねてください。

■今年の算数は！？

京女ブレを踏襲した問題だがやや難化！平均点が40点台に！

■出題形式

①は四則計算が5問。②は独立小問が6問。③以降は大問となっている。今年度(20年度)は、大問が1問増え、6問になったが、全体的には、5点の小問が20問という形式になっている。今年度も、昨年度(19年度)に続き、計算、図形、整数、規則性という限られた単元に特化した入試であった。

プレテスト(京都女子中学主催:『京女オープン模試』…例年10月頃に実施)を踏襲した問題が出題されるのも大きな特徴である。

	2018年度	2019年度	2020年度
制限時間	60分	60分	60分
大問数	5問	5問	6問
小問数	20問	20問	20問
配点	ⅡS 150点 ⅡL 100点	Ⅲ類 150点 Ⅱ類 100点	Ⅲ類 150点 Ⅱ類 100点
最高点	95点	95点	90点
受験者平均点	57.2点	63.3点	47.2点
合格者平均点	非公表	非公表	非公表

※ Ⅱ類は国・算・理・社各100点の400点満点で判定。Ⅲ類は算数150点、国語・理科各100点と社会50点の400点満点で判定。

■出題内容

- ① (1)~(5)四則計算
- ② (1)平方数の和 (2)濃度 (3)整数 (4)3つのつるかめ算 (5)平面図形(30° 60° 90°の利用)
(6)平面図形(正方形の分割)
- ③ 立体図形の移動(円柱の移動)
- ④ 整数(2進法)
- ⑤ 整数(等差数列と簡単な論理)
- ⑥ 整数(平易な規則と調べあげる問題)

①の計算問題5問は標準的な問題。ミスをせずに解く必要がある。
②の(1)~(6)はすべてが独立小問。プレテストの問題を踏襲した「平方数の和」や「割合」などが含まれる。今年度は、(1)はプレテストとほぼ同じ問題であった。また、例年、平面図形の角度に関する問題が出題されることが多いが、ほとんどが基本的な問題である。

③は立体図形の移動の問題。プレテストと小問設定が同じで、円の周りの移動から正方形の周りの移動に変化しただけであった。

④は2進法の問題。2進法を用いなくても場合の数として解答しても問題なかった。条件をしっかりと確認して(1)(2)までは確実に解答しておきたい。

⑤は整数の問題で、等差数列を利用して、丁寧に調べることで解答できる。

⑥は約束に従って計算する問題。(1)は確実に正解したいところ。(2)は京女でよく出題される調べあげの問題。全パターンを調べても時間がかからないので、時間が余れば確実に解きたい。時間がない場合は捨てるには影響がないものと考えられる。

■合格に向けての対策

今年度入試は、受験者平均点が昨年度の63.3点より16.1点低下した47.2点に留まっています。ただし、問題の難易度の変化はやや難化程度で、これは高槻の共学化の影響で上位層の受験生が減少していることに起因していると思われます。

①の計算問題は、分配法則などを用いて工夫すべきものがときどき見られるので、ミスをせず得点源にしてください。②の独立小問は、プレテストの類似問題が出題されることがしばしばあります。プレテストの復習は極めて有効といえます。

例年、図形に関しての京女の大きなこだわりは、円周率を7分の22と指定していることです(ただし、B1・B2入試は3.14です)。これには十分練習して慣れておきたいところです。円やおうぎ形を底面とした立体図形の問題は、'12年度から'18年度まで6年連続で出題されており、昨年度は出題されませんでした。今年度は復活しています。平面図形も円、おうぎ形の出題率が極めて高くなっています(さすがに今年度は極端ですが...)。なお、'12年度、'13年度、'15年度、'18年度に見られる、円周を等分割した点や正多角形を使った角度の問題は難問になっているので要注意です。④、⑤に見られる「整数の性質」や「規則性」に関しては、オーソドックスなものも多いのですが、与えられたルールに従って計算したものを考えさせる問題が頻出です('10年度、'11年度、'14年度、'15年度、'16年度、'17年度)。問題文をよく読んで、正しく作業することから心がけてください。

過去問と同様の問題が多数出題される学校なので、テキストの基本問題をしっかりと練習した上で、最低6年分(余裕があるなら10年分)の過去問の練習をおすすめします。また、今年度は例年以上にプレテストで出題された類似問題が本試験でも出題されていたので、京女志望者は必ずプレテストを受験し、その復習をしっかりとってください。

■今年の理科は！？

久しぶりのお手本問題！まとまりのある基本問題集！！

■出題形式

今年度（'20年度）の大問数は6問で、昨年度（'20年度）から変化していない。小問数は39問で、完答問題2問を含め解答欄数は41個。選択問題25問、用語解答4問、計算問題9問、数値解答問題1問の構成となっている。

昨年度まで、多い年度では3問程度あった記述問題が今年度は無くなっている。また、計算問題は昨年度から4問増えて今年度の数になっているが、'17年度以前は18問前後と、小問の40%近くを計算問題が占めていたことから考えると、減少傾向にあるといえる。

最高点と受験者平均点の推移がほぼ同じような動きを示していることから、解き辛い（間違えやすい）問題が最低でも1問～2問は出題されていることが窺える。

	2018年度	2019年度	2020年度
制限時間	40分	40分	40分
大問数	4問	6問	6問
小問数	44問	45問	39問
配点	100点	100点	100点
最高点	90点	98点	96点
受験者平均点	61.1点	71.4点	66.5点
合格者平均点	非公表	非公表	非公表

※ II類は国・算・理・社各100点の400点満点で判定。III類は算数150点、国語・理科各100点と社会50点の400点満点で判定。

■出題内容

- I 生物 花のつくり・種子のでき方・蒸散計算 II 生物 ヒトの誕生
- III 物理 ばね計算・てことばねの複合計算 IV 物理 光の性質（屈折）
- V 物理・化学 物のあたたまり方・物の温度と体積変化・濃度計算・密度計算・浮力・時事問題
- VI 地学 流水のはたらき、地層のでき方

I 問1～問4は花のつくりに関する問題。問5・問6は種子のつくりと種子散布の問題。問5は選択問題であるが、答として選べるものが3つあるのに対して、問題で2つ答えなさいと指示がされている、京都女子独特の問題。問7は蒸散計算の問題。見たことの無い問題は無い。

II ヒトの誕生についての選択問題2問。いずれも基本問題。

III 2種類のばねを使った、ばね計算・てことばねの複合計算の問題。いずれも基本問題。

IV 光の屈折についての選択問題2問。すこし迷うかもしれないが、基本の考え方ができていれば、両方正解は可能。

V 問1～問4が水のあたたまり方と、温度と体積変化に関する問題。問4の実験1Bが、やや選びにくい、太陽の光の下に放置した水のあたたまり方を問う問題になっている。問6～問8については濃度計算や密度計算、浮力に関する基本問題。問9はマイクロプラスチックの最初の4字を答えさせる、いわゆる時事問題。

VI 問1～問3が流水のはたらきに関する問題、問4～問7は化石に関する問題を含む地層のでき方についての問題。問7の①、②は図に手を加えないと解きにくく、少し考えさせる問題かと思われる。

■合格に向けての対策

大問6問のうち、2問は小問2問だけの問題です。あえて総合問題の大問をつくらず、小問数の多少に関わらずテーマごとに大問を設定していることから、京都女子の理科の入試問題がしっかりとした合格ラインの目安を持ってつくられているということがわかります。また、ある程度の小問数をそろえた大問は、後半に少し考えさせる問題（間違えやすい問題）を出題しています。受験生にとって全く解けないという問題はないので、ある程度安心して解き進めることができ、かつ、「少し立ち止まって考えてください。」ということを示唆するつくりになっています。

6つのテーマは植物、動物、物理×2、化学、地学と、おおよそ決まっていますが、細かな単元については、どこから出題されるかはわかりません。当たり前のことですが、全ての単元において、基本となることは確実にできるようにしておきましょう。過去には生物分野において難問や奇問が出題されたこともありますが、近年は落ち着いた基本問題になってきています。ただし、問い方として、答えが3つあるのに「2つ答えなさい」であるや、複数の組み合わせがあるのに「組み合わせを1つ答えなさい。」など、いざ答えようとするときに少し迷いが生じるような独特の問題は出題されるので、注意してください。

計算問題や記述問題が少なくなっているとはいえ、過去にはこれらを多く出題してきた学校なので、過去問での対策は必須です。9月以降、メンター（講師）の指示に従って、解き進めましょう。特に選択問題で出題されている生物名を含む様々なものや現象の名まえについては、それそのものを用語解答として出題してくる可能性が高い学校です。解いたあとに、答以外のものについても、再確認（復習）をしましょう。見たことが無いものは含まれず、必ず、何らかの事例となる性質を持っているものが出題されています。

■今年の社会は！？

「緯度の高い順」「世界地理」は今後もつづく!?

■出題形式

例年見られる「記号解答」と「語句解答」の混合形式は、昨年度（'19年度）は語句解答22問中、18問が「漢字指定」であったが、今年度（'20年度）は語句解答21問、そのうち漢字指定は18問であった。

ここ数年見られる「緯度の高い」順に並べ替える出題が、今年度も出題があった。

	2018年度	2019年度	2020年度
制限時間	40分	40分	40分
大問数	8問	8問	7問
小問数	50問	50問	50問
配点	100点	100点	100点
最高点	90点	88点	80点
受験者平均点	61.4点	54.5点	57.5点
合格者平均点	非公表	非公表	非公表

※ II類は国・算・理・社各100点の400点満点で判定。III類は算数150点、国語・理科各100点と社会50点の400点満点で判定。

■出題内容

- 1 日本の8地方をテーマにした都道府県・島に関する問題。
- 2 南北アメリカ大陸の地図を使った問題。
- 3 5つの項目に関連する場所を、緯度の高い順に並べかえる。
- 4 弥生～昭和時代の年表に関する問題。
- 5 4つの歴史上の出来事の文に関する問題。
- 6 日本国憲法の条文をテーマにした問題。
- 7 夏季・冬季オリンピック開催地をテーマにした問題。

「地理分野」

昨年度の形式とあまり変化はなかった。ここ数年出題が見られる「緯度の高い順」に場所を並べかえるという出題が、今年度も出題された。この形式は次年度（'21年度）以降も出題されることを（「緯度の低い順に」と出題されることも）予想して、日々の学習の中で出てきた地名は、必ず場所を把握しておくようにしたい。また、世界の国々に関する出題が'18年度（東南アジア）、昨年度（ヨーロッパ）に引き続き出されたので、次年度もこの単元の学習はしっかりとっておきたい。世界地図を確認し、赤道・北回帰線・南回帰線の場所、世界の気候のグラフなどに注意しながら学習するとよいだろう。また、数年前まで大問として出題されていた「貿易（日本の輸出入品）」に関する問いが、世界の国々の問題とあわせて出題されるようになってはいるものの、引き続き出題されることが予想される。

「歴史分野」

出題形式は大きな変更は見られなかったが、用語解答はほぼ漢字指定であった。当学校を志望する受験生は、歴史用語を漢字できっちり書けるようにしておくことは必須である。よって、時代の流れを理解するとともに、重要な基本語句を漢字で書く学習をしておくこと。また、「年表」「空欄補充」「時代順整序」の出題形式は今後も踏襲されると思われるため、志望者は対策をきっちりとして臨むことが必要である。

「政治・時事分野」

天皇に関する日本国憲法の条文を用いた問題や夏季・冬季オリンピックの開催地をテーマにした問題でやや時事的な出題が見られた。どちらの問題も難易度は標準的なものであるが、時事的語句（ニュースなどで取り上げられた語句）をそのまま解答させるのではなく、関連する事柄が出題されていた（例：世界遺産登録件数の多い国。ロサンゼルスはアメリカ合衆国の何州にあるか）。次年度もこのような出題がなされると予想されるので、時事問題は、地理・歴史・公民の分野の垣根をこえて総合的に学習する必要がある。

■合格に向けての対策

例年、京都女子中といえば「漢字指定」といわれるほど、語句解答に占める割合が高く、また、一般に漢字指定の多い歴史分野に限らず政治分野の語句解答でも漢字指定の問題がほぼ出題されます。今後も基本語句に関しては漢字の書き取りが必要不可欠と考えられます。

次年度以降の対策として、成基学園からのテキスト（『古今東西』『地図帳』『日本のすがた』）の基本事項を徹底して学習すれば、十分合格点は狙える学校です。しかし、歴史分野の問題に見られるように、歴史用語を漢字で書けるだけではなく、各時代の内容も正しく理解していく学習が必要です（これはどこの学校でも言えるのですが…）。また、例年、出題頻度の高い「世界地理」「都道府県の特徴」「歴史年表」「時事問題」に関しては、当学校の過去問だけでなく、同レベルの中学校の類似問題などで対策をしておくことが望ましいです。